

『元朝秘史』の地の文における “我々”表現に隠された意図 —巻3第110節～巻11第263節における 一人称複数形についての考察—

藤井 真湖

本論はモンゴルの古事記ともいべき『元朝秘史』（四部叢刊本）の文学的テキスト研究である。『元朝秘史』（以下、秘史）には地の文において“我々の兵士達”という、語り手のスタンスを示唆する表現が計26例存在する。従来の研究では、秘史がチンギス・カンの権威に忠実に構成された外観をもっているために、“我々の兵士達”というような表現はチンギス側に立つ姿勢を表すものだと見なされてきたといえる¹⁾。しかしこうした「常識」を捨てて語り手のスタンスを表すこの“我々”表現を考察すると、興味深い事実が立ち現われてくる。語り手はチンギス陣営に途中で投降或いは参入した人物である可能性を強くうかがわせているからである。さらに興味深いことに、語り手は自身の、もともと所属していた集団が従っていた人物に配慮しながら叙述を構成していることが観察される。本論は、“我々”表現に隠された意図を明らかにすることを目的とするものである。

1. 本論における対象と方法論

本論の目的は、『元朝秘史』（以下、秘史）の地の文における“我々”表現に着目して、この表現が現れる文脈における隠された意図を探ることである。まずは、本論の対象を明らかにしたうえで、方法論に関わる事柄を幾つか述べておきたい。

考察の対象となる“我々”表現とは、会話文ではなく、地の文で現れる“我々”表現のことである。会話文で現れる“我々”という表現の場合、その指示対象は発話者或いは発話者を含む複数の人間である。指示対象が明瞭なので、そこに謎はない。これに対し、地の文で現れる“我々”の場合は違う。この表現が現れる内容には、話者の政治的スタンスが現れることは確かであるが、話者が誰なのかは不明のままである。この点で、地の文の“我々”表現は興味深い考察対象となる。

秘史の場合、“我々”は *bida* で表されており、読者を含まない *manai* と対比されるところの、読者を含む話者を意味していることも重要である。この語が選択されたからには、語り手は読み手の意識に合わせようとするか、あるいは、同調を求めようとするスタンスを取っていることが理解されるからである。いずれにせよ、“我々”表現は、読み手を巻き込みながら、語り手が自らの正体を隠蔽しつつ、かつ自らのスタンスを明瞭に表明する興味深い表現となっているのである。

地の文で用いられる“我々”表現は4通りの現れ方をしている。頻度の多いものから挙げると、19回現れる“我々の”を意味する“必荅-訥 (*bidan-u*)”、5回現れる“我々のところの

者”を意味する“必蒼訥埃 (bidan-u'ai)”²⁾、1 回のみ現れる“我々から”を意味する“必蒼納察 (bidan-ača)”、同じく 1 回のみ現れる“我々を”を意味する“必蒼泥 (bidan-i)”である。合計して 26 事例となる。本論では取りこぼしがないように、四部叢刊本を基にした栗林均編『「元朝秘史」モンゴル語漢字音訳・傍訳漢語対照語彙』(東北アジア研究センター叢書第 33 号 東北大学東北アジア研究センター 2009 年)を参考に事例を抽出した³⁾。

以下、こうした対象をどのように考察するかという方法論について述べておきたい。

第 1 に、本考察においては、歴史人物としてのチンギス・カン研究或いはモンゴルの歴史研究を参照にしない。その理由は、秘史の文学的テキスト研究として、まずは秘史テキストそのものに着目する必要があると考えるためである。史実としてのチンギスやモンゴルの歴史は、言語外事実を無視したテキスト言語内研究をおこなった後に照合したいと考えている⁴⁾。

第 2 に、本論では、“我々の～”というような表現を取る場合に含意されている主体を“語り手”と呼ぶこととし、本論の“語り手”についての考察は従来の秘史の作者論からは切り離しておく。“語り手 narrator”が従来の研究において言及されてきた“作者 author”と密接に関係していることは疑いようがないが、詳細に整理するのは今後の課題としたい。ここでは“我々”表現に関する議論の際には“語り手”、それ以外の箇所ですべての筆者の一連の秘史研究において明らかになった作品の意図に触れるさいには“作者”と使い分けておくことにする。これと関連して、秘史の場合、「作者」とは具体的に何を意味するタームなのかを今後改めて論じる必要があることを指摘しておきたい。

第 3 に、本論のテキスト解釈であるが、この解釈の方法論は、フランスの構造分析・記号論者であるロラン・バルト Roland Barthes の『物語の構造分析』における行為項分析と機能体分析のどちらか、あるいは両者を組み合わせたものとなっている⁵⁾。この詳細な分析の紹介と実際の応用については拙著の関連箇所を参照にされたい⁶⁾。

第 4 に、第 3 と関連するが、事例の解釈において、当該箇所の事例の分析で解釈しえない場合、それ以前の解釈を踏襲するという仮定的推論法 (abduction) を用いることにしたい⁷⁾。

2. 考察

1. で述べたように、本節以降においては、地の文で現れる“我々”表現を秘史で現れる順番に整理しなおしたものを表 1 として挙げておきたい。表 1 に「四部叢刊本の箇所」とあるのは、前出の栗林均の著書に挙げられた記載を踏襲している。例えば、①について言えば、03:15:02 は秘史の四部叢刊本の第 3 巻の第 15 丁目の 2 行目を意味している。考察は、表 1 の①～⑳について順次おこなうことにしたい。なお、本文における邦訳は基本的に 1984 年から 1989 年にかけて刊行された小沢重男『元朝秘史全訳』3 巻及び『元朝秘史全訳続攷』3 巻 (風間書房) に基づいているが、人名・地名その他のカタカナ表記は若干異なっていることがある。その他、若干訳語を変えたところがあることを断っておきたい。引用する際には原文の転写を付すべきだが、紙数の関係上、割愛せざるを得なかった。それゆえ確認の場合は原典に当たられたい⁸⁾。また 26 事例を便宜的に 12 のグループ、すなわち 2.1. ～2.12 に分節したことを断っておく。

2. 1. ジャムカ陣営からチングス陣営に投降する語り手

以下、表1の①～②⑥の26事例を一つずつ考察する。ただし、同巻の同節において複数回、“我々”表現が現れる場合には、まとめて扱うことにする。本考察は、文脈を考慮しないかぎり意味をなさないので、当該節の概要（明示的内容の要約）をそれぞれ示すことにする。

表1：『元朝秘史』に出現する地の文における“我々”表現（昇順）

番号	語形（転写形）	意味	巻・節（§）	四部叢刊本の箇所
①	bidan-u	我々の	巻3 §110	03 : 15 : 02
②	同上	〃	巻3 §114	03 : 24 : 01
③	bidan-u'ai	我々のところの者	巻3 §119	03 : 32 : 10
④	bidan-u	我々の	巻4 §128	04 : 02 : 06
⑤	bidan- ača	我々から	巻4 §131	04 : 08 : 04
⑥	bidan-u	我々の	巻4 §131	04 : 08 : 06
⑦	同上	〃	巻4 §135	04 : 17 : 02
⑧	同上	〃	巻4 §136	04 : 18 : 06
⑨	同上	〃	巻4 §142	04 : 33 : 09
⑩	同上	〃	巻4 §142	04 : 34 : 08
⑪	同上	〃	巻4 §146	04 : 46 : 09
⑫	同上	〃	巻5 §154	05 : 20 : 05
⑬	同上	〃	巻5 §154	05 : 21 : 01
⑭	同上	〃	巻5 §155	05 : 23 : 07
⑮	同上	〃	巻5 §158	05 : 28 : 06
⑯	bidan-i	我々を	第5 §165	05 : 39 : 05
⑰	bidan-u'ai	我々のところの者	巻6 §171	06 : 09 : 10
⑱	同上	〃	巻6 §171	06 : 10 : 01
⑲	同上	〃	巻6 §172	06 : 11 : 06
⑳	bidan-u	我々の	巻7 §193	07 : 22 : 09
㉑	同上	〃	巻7 §193	07 : 22 : 10
㉒	bidan-u'ai	我々のところの者	巻7 §193	07 : 23 : 03
㉓	bidan-u	我々の	巻7 §195	07 : 32 : 08
㉔	同上	〃	巻8 §198	08 : 04 : 09
㉕	同上	〃	巻11 §248	11 : 07 : 02
㉖	同上	〃	巻11 §263	11 : 50 : 08

① 第3巻 §110 「我々の兵士達は逃走していくメルキト族を夜であっても掠奪していく時」（bidan-u 03 : 15 : 02）（下線筆者、以下の事例でも同様）

§110の概要：本節は§104から連続しているので、§104の要約も含めて述べる。チングスはメルキト族に奪われた妻ボルテを奪回するためにケレイト族の王罕に救援を乞う。王罕はジャジラアト族のジャムカにも軍を出動するように要請する。その結果、王罕軍、ジャムカ軍、チングス軍の3軍はメルキト族を逃走させる。これに続く本節 §110 では、「メルキト族の民はセレンゲ河を下って、夜に逃走していく時、我々の兵士達は逃走していくメルキト族を夜であっても掠奪していく時」チングスはその逃走中の集団の中にいた妻ボルテと再会する。

考察：この事例は語り手が表れる最初の事例であり、このボルテ奪回の時点で最初の事例が現れることの意味は大きい。この場面における“我々の兵士達”という表現は、メルキト族に奪われたチングスの正妻ボルテ夫人を救出するチングス側の部隊、すなわち、チングス軍と王罕軍とジャムカ軍という3つの軍から構成される部隊に語り手がいた、或いは「いたとする」

書き方である。この叙述の仕方は、ボルテ夫人を救出する部隊に語り手がいたということであり、それまで語り手の存在を示す表現がないことを重視すると、語り手は、ボルテ救出の際に参加したケレイト軍がジャムカ軍のどちらかの軍の中にいた、もしくは「いたことにしている」ということになる。つまり、もともとチンギスがボルテを失う以前、すなわちチンギス一家がタイチウド族に捨てられた際には語り手はチンギス陣営にいなかったことを暗示している。

② 第3巻 § 114 「我々の兵士達が居営地に残っていたのを発見して」(bidan-u 03 : 24 : 01)

§ 114 の概要：ボルテ夫人を奪回した後、チンギス軍、王罕軍、ジャムカ軍の3陣営はメルキト族を攻めるが、ウドイト・メルキト族が逃げる時に、“我々の兵士達”がその宿営地に残されている5歳のクチュという男の子を発見して連れ帰って、ホエルン母に贈り物として与えた。

考察：秘史においては、敵陣の宿営地から幼児を拾ってきてホエルン・エケに贈るという叙述パターンが4回現れるが、これはその第1回目の場面となる。この場面で“我々の兵士達”という表現が現れるということは、この拾い子のモチーフに語り手が関わっている、或いは関わっていたとしている、ということを示している。このことが非明示的に何を意味するのかについては、この箇所だけで判断することは難しいので後続の部分で考察することにしたい。

③ 巻3 § 119 bidan-u'ai 「ココチュという名の子供が居営地に残っていたのを我々のところの者が連れてきて」(03 : 32 : 10)

§ 119 の概要：当該節は前節との関連が強いので § 118 の概要も示す。§ 118 では、ボルテ夫人をメルキト族から救出した後、チンギスとジャムカはそのまま離れずに行動を共にする。しかし、あるとき、ジャムカの発した言葉の解釈をめぐり、ボルテ夫人がチンギスにジャムカから離れるように進言する。チンギスはボルテの進言を受け入れ、ジャムカと決別する。続く本節 § 119 では、ボルテ夫人の発言に従って、チンギス陣営がジャムカの指定した場所に下営せず移動したことが述べられ、タイチウド族の側を通過したさいに、タイチウド族がジャムカ陣営に移動したことが叙述されている。このときに、タイチウド族のベスト族の宿営地に幼いココチュという名の子供が残されていたのを“我々のところの者”が連れてきてホエルン母に与え、ホエルン母はその子供を養育したという内容が叙述されている。

考察：ここでは、②とは異なり、bidan-u'ai という形が用いられている。この表現は、“我々のところの者”がタイチウド族のベスト部の居営地にココチュという名前の子供がいたのを拾ってホエルンに与えたという叙述の中で現れる。②と同様な内容であるが、大きな違いがある。なぜなら、この子供を拾ってきた出来事が生じた時点においては、王罕はすでに自分の領地に帰っているからである。つまり、ここから判明するのは、語り手が王罕軍ではなく、もともとジャムカ側に属していた人間だということである。

しかし、§ 119 の概要を見ると、ジャムカ陣営に属しているはずの語り手は、テムジン陣営の人間となって、タイチウド族のベスト族の地からココチュを拾ってくる人々のなかにいる。これはどうしたことであろうか。§ 119 の全文は次のようになっている。

ボルテ夫人の言葉を以て是として(そこに)幕営しないで夜を徹して移動してやって来るとき、途中、路でタイチウド族(の傍)を通り過ぎた。タイチウド族は驚いて、その夜にあって、混乱してジャムカの方へ移動した。タイチウド族のベスト族の居営地に、一人の幼いココチュという名の子供が居営地に

残っていたのを、③我々のところの者が連れてきて、ホエルン母に与えた。ホエルン母が養った。

以上のように、全文をみても、語り手がタイチウド族の地からココチュを拾ってくる人々の中にいたことは確実である。つまり、語り手は、いつジャムカ陣営からテムジン陣営に移動してきたのかは不明であるが、ココチュを連れてくる時点では、すでにテムジン陣営にいるのである。

このあたりの矛盾した状況をうまく説明するためには、次のように考えなくてはならないだろう。②と③との間に語り手の存在を示すような表現は全く見当たらないのであるから、ココチュという子供をタイチウド族の地から連れてくる正にその時に、語り手はジャムカ陣営からチンギス陣営に移動してきたと考えるしかない。ジャムカ陣営からチンギス陣営に移動してきたので、この時点で、語り手は、チンギス陣営の“我々のところの者”と言っても差し支えないであろう。

このように考えると、語り手は元々、ジャムカ陣営にいながら、同時にタイチウド族にも属していたことになる。だからこそ、語り手は、チンギスとタイチウド族との間でいかなる戦いも起こっていないときに、タイチウド族の宿営地からチンギス陣営にタイチウド族の子供を連れてくることができたのである。つまり、語り手は、ジャムカとチンギスの仲が決裂した時に、ジャムカでなくチンギスを選んで、このココチュとともにチンギス陣営に降ったということになる。

この可能性は、①でメルキト族に奪われたボルテ夫人奪還で秘かなる手柄を立てようとする語り手の隠された“自己顕示欲”を考慮に入れると頷けるものとなる。なぜなら、語り手がジャムカ陣営に属していて、同時にタイチウド集団に属している人物で—ただしタイチウド族出身者ではなくともかまわない—、秘史のこの③の叙述の位置でチンギス側に来ているとすると、秘史において他の集団からの投降者の中でも最も早くチンギスに投降した者だという榮譽を担うからである。

このように考えるならば、なぜこの人物が自己の名前を伏せなければならなかったかも推測できる。それは、この人物が二重に主君を裏切っているからにほかならない。その主君とは語り手の直接の主人であるタイチウド族の領袖と⁹⁾、タイチウド族が味方しているジャムカという2人の人物である。

2. 2. サアリ草原を活動拠点としている語り手

④ 卷4 §128 *bidan-u* 「我々のサアリ草原にいるジョチ・ダルマラの馬群」(04:02:06)

§128の概要：重要なので§128の全文を下記に引用する。

その後、ジャムカの弟タイチャルはジャラマ山の南麓オレガイ・ボラクにいて、④我々のサアリ草原にいるジョチ・ダルマラの馬群を奪い取り去った。タイチャルはジョチ・ダルマラの馬群を奪い取って行った。ジョチ・ダルマラは自分の馬群を奪い行かれて、友人達に臆されて、ジョチ・ダルマラだけが追っていき、夜、自分の馬群のあたりに到り、自分の馬の鬣に胸腹をつけて臥して、タイチャルの背を貫き殺して、自分の馬群を取り返してきた。

考察：上記の引用文を要約するなら、この§128は、チンギスとジャムカとの仲が決定的に

決裂した事件を物語った箇所となる。この節においては、ジャムカの弟タイチャルがチンギス側のジョチ・ダルマラという人物の馬群を奪いにいったとある。ところが逆に、ジョチ・ダルマラはタイチャルを追跡し、タイチャルの背を突き刺して殺害する。この事件で弟をチンギス陣営の者に殺されたジャムカは完全にチンギスに対立する。

事件の表層を見る限り、ジャムカの弟の方が他者の馬群に手を出そうとしているので、一見、ジャムカの激怒は腑に落ちない気がする。しかし、ここで語り手がもともとジャムカ陣営にいた人物であるとする、秘史には叙述されていないが、この語り手が所有する馬もあったであろうから、ジャムカ側からすれば、ジョチ・ダルマラの馬群はもともと自分たちのものであるはずだという意識があったとしても不思議はない。とすれば、ジャムカの立場にたてば、弟タイチャルの死はチンギス側にすべて非のある出来事だということになる。

事件そのものとは直接関係しないが、この事件の発端となった場所が“我らのサアリ草原”と表現されていることは注意を引く。なぜなら、“我々”表現の出てくる箇所にはしばしば“サアリ草原”という地名が登場するからである。つまり、語り手の活動拠点はサアリ草原であったらしいことが暗示されているのである。

補足として付け加えたいのは次のことである。このタイチャル事件が契機となり、ジャムカ陣営とチンギス陣営はダラン・バルジュドで戦うことになるが、ダラン・バルジュドの戦いで、チンギス陣営は“そこで動かされて”と叙述されていることである。この表現は一見チンギス側がジャムカ側に敗北した表現として読み取れる。ただし、このような表現がなされるにも関わらず、この戦いの後、ジャムカ陣営にいた多くの集団がチンギス陣営に降ってきたと叙述されている。つまり、秘史の叙述を見る限り、ダラン・バルジュドの戦いの勝敗については非常に曖昧な叙述がなされていると言わざるをえない。

こうした曖昧な叙述の背景には、語り手の心情が関係しているように思われる。語り手はジャムカ陣営からチンギス陣営に移ってはいるものの、後続でも示すことになるように、語り手のジャムカ寄りの叙述が随所に見られ、心情的にはジャムカに属していたとみなせるからである。つまり、ダラン・バルジュドの勝敗を明確にさせないでいたいという語り手の心理がこの戦いの勝敗の描き方に作用した可能性をここで指摘しておきたい。

2. 3. タタル族に好意的な語り手

⑤ 第4巻 § 131 *bidan- ača* 「その宴を我々からはベルグテイが治めていて」(04 : 08 : 04)

§ 131 の概要：前節に連続する箇所なので § 130 の概要も述べる。§ 130 では、ジャムカとの戦いが一段落し、チンギス陣営に多くの集団が移動してきたことをチンギスが喜んだこと、その象徴としてジュルキン族のサチャ・ベキヤタイチュととも宴を催したことが叙述されている。続く § 131 では、チンギス陣営からはチンギスの弟ベルクテイが宴をしきっていたが、ジュルキン族陣営にいたカタギン族の者がチンギス陣営から端網を盗んだのをベルグテイが捕えたこと、ジュルキン族陣営から宴を仕切っていたブリ・ボコという人物がその窃盗を庇い、逆にベルクテイの肩を切り付けて危害を加えたこと、チンギスがこれを知ってベルグテイに事の顛末を問いただしたこと、ベルグテイはチンギスがジュルキン族とせつかく仲良くしようとしているのだから大丈夫であると言って兄チンギスの憤慨をなだめようとしたことが叙述されている。

考察：秘史の「作者」がベルグテイに同情的であったことは、本誌第6号ですでに論じたの

でここでは繰り返さない。ここで重要なのは、「作者」と語り手が同一かどうかはわからないものの、“我々からはベルグテイが治めていて”という表現から、語り手にはベルグテイに対する共感があることが理解されることである。つまり、この場面においては語り手と「作者」のスタンスは重なっていることが観察される。

⑥ 卷4 §131 *bidan-u* 「我々の馬つなぎ場からカタギン族の者が馬の引き綱を盗んだのを捉えた」(04:08:06)

考察: この⑥は⑤と同じ節にあるので概要は示さない。⑥の主語は原文では示されていない。明示的には、主語はベルグテイだと読めるが、非明示的には、語り手であってもよいようになっている。

⑦ 卷4 §135 *bidan-u* 「(タタル族を)掠め取った時に、一人の小さい子供を捨てたのを我々の兵士達が居营地から見つけた」(04:17:02)

§135の概要: 本節では、チンギス陣営はタタル族攻略の際に、ひとりの幼子が放棄されたのを“我々の兵士達”が見つけ出し、ホエルン母に贈り物として与えたこと、ホエルン母はこの幼子の身なりのよさを見て「出自良き人の一族だ」と言って、自分の5人の子供たちの第6の子供として“シギケン・ホトク”と名付けて養育したという内容が叙述されている。

考察: この箇所は、タタル族の子供を連れてきた兵士達の中に語り手が含まれていた、あるいは含まれていたとする叙述である。ここで見つけ出された子供はシギケン・ホトク、秘史の他の箇所ではシギ・ホトクと出てくる人物である。この人物は、②におけるクチュヤ③におけるククチュと同様にホエルン母に与えられたが、この人物だけはチンギスの「第6の弟」となると叙述されている。

敵陣の宿营地から拾われた子供は秘史を通して全部で4人いるが、興味深いことに、語り手はそのうちの3人に関わっていることになる。このことは、語り手と拾い子との間に強いコネクションを形成しただけでなく、語り手とホエルンとの間にも強いコネクションを作ったことを暗示している。拾い子のモチーフは拾い子に注意が向けられがちだが、実際には語り手の人間関係ネットワークを示しているという側面を見逃すわけにはいかないだろう。とくに、ホエルンとのコネクションは、ボルテ夫人を奪還する以前のホエルンの婚姻やチンギス一家の叙述内容と深く関係しているように思われる。すなわち、ホエルンがメルキト族のチレドからイエスゲイ・バートルに奪われた詳細な経緯やチンギスの幼少期の出来事についての情報源はホエルンで、語り手はホエルンから聞き取りした可能性があるのではなかろうか¹⁰⁾。

では、語り手が関わらなかったボロクルはどのように拾われてチンギス陣営に入ったと叙述されているのであろうか。ボロクルの場合、卷4 §137において、ジャライル族のジェブケがジュルキン族の宿营地から拾ってきてホエルンに与えたとある。このジェブケという人物は、チンギスがジュルキン族を殲滅したさいに、ジュルキン族のもとにいたジャライル族から投降してきた人物で、ジェブケ本人はチンギスの弟カサルに与えられたと叙述されている。ボロクルだけなぜ別扱いになっているのかは別に考察する必要があるように思われる。卷4 §138には4人の拾い子がどこの部族から拾われてきたのかということが一括して記されているが、やはり語り手の関与の有無と関連付けて考察すべきであろう。

2. 4. ジュルキン族に敵対的な語り手

⑧ 卷4 §136 『ジュルキン族にそのようにされた』と我々の留守陣営に残った者たちがチンギス・カハンに告げると」(04:18:06)

§136の概要: §136ではジュルキン族がチンギス陣営の対タタル戦に参加しないという裏切りを犯しただけでなく、チンギス陣営が対タタル戦に出かけたあとに残った留守陣をジュルキン族が襲い、50人の衣服をはぎとり、10人を殺害したこと、この状況を“我々の”留守陣営に残った者たちがチンギスに告げたこと、これに対してチンギスはジュルキン族に出陣し、サチャ・ベキやタイチュが以前にチンギスに誓った忠誠を思い出させ、チンギスがこの2人を殺害したことが叙述されている。

考察: 上記の内容をみると、語り手はジュルキン族に襲われるチンギス陣営にいた、或いはいたかのように読める。⑦の考察において、ボロクルだけが拾い子の中で他の3人とは別の扱いをされていることに言及したが、その背景には、ボロクルがジュルキン族の宿営地から発見されていることも考慮に入れる必要があるかもしれない。この問題はさらなる考察が必要である。むろん前述したように、その際にはボロクルも含めて4人の拾い子がまとめて叙述されている理由も同時に考察されなければならないだろう。

ところで、秘史には、ジュルキン族に肩入れして、ベルグテイの肩に傷をつけたブリ・ボコのことが秘史で3度も言及されている。このことはベルグテイへの好意という可能性だけでなく、語り手もまた被害を蒙ったことからくるジュルキン族に対する恨みの感情も背景にあるのかもしれないと感じさせる。

2. 5. チンギス陣営にしながらジャムカに配慮する語り手

⑨ 卷4 §142 「我々の先遣隊アルタン、クチャル、セングム等はウドキヤに到って」(04:33:09)

§142の概要: ジャムカがカン(王)に推戴された§141の出来事を受けて本節の§142では、王罕とチンギスが協力してジャムカに出陣したこと、チンギスはアルタン、クチャル、ダリタイの3人を先遣隊に出し、王罕もまた別の3人を先遣隊として遣わしたこと、これらの先遣隊の最前線に斥候を三重に派遣したこと、「我々の先遣隊アルタン、クチャル、セングム等はウドキヤに到って」ジャムカの陣営の先遣隊と言葉のやり取りをしたこと、これらの言葉のやり取りをしているうちに日が暮れたという内容が叙述されている。

考察: §142はチンギス軍と王罕軍が対ジャムカ戦争をしかけたことについて叙述されているくぐりである。“我々の先遣隊”と表現されているように、語り手はこの先遣隊に属しているように叙述しながらも、アルタン、クチャル、セングムという具体的な人物名を入れていることは注意を引く。チンギス側に属しながらも別の人物の名前を入れることによって語り手は何を意図したのであろうか。この場合、具体的な名前を挿入によって、語り手はチンギス側にいることを曖昧させることができるということが考えられる。

このようなやり方は、語り手の境遇についての前述したような仮説を考えると理解できるものとなる。なぜなら、チンギスとジャムカの間戦争とあれば、もともとジャムカ陣営にいたと考えられる語り手がチンギス陣営にあってジャムカに戦争をしかけるということは、忠義と

いう観点からみて非難されるべき行動を取っていることになるからである。“我々の”と言いつつ別の人物の名前を挿入することは、こうした非難をかわすためだとも考えられる。

この観点からみると、ここで具体的人名として選ばれた人物は興味深い。最初のアルタンとクチャルは後にチンギスを裏切ってケレイト族の王罕の息子セングムに合流する人物である。そしてこのセングムは後続の部分でチンギスに敗れる。つまり、ここで“我々の”と言われる人々は後続の展開においてチンギスを裏切る人々なのである。つまり、こうした裏切り者の中に語り手は与していることになるのである。このように、語り手はチンギス陣営に属しながらもチンギス陣営の側には立っていないことが示唆されている。本節を巻5 §166の内容と対比させると非常に興味深いことが判明する。

§166では、チンギスが王罕との関係を深めようとして婚姻関係の提案に異を唱えたセングムにチンギスが心穏やかではないのをジャムカが覚って、亥の年の春、ジャムカ、アルタン、クチャル、・・・等々が一団となってチンギスに敵対したとする内容が記されているからである（強調筆者）。本節 §142 における人名の選択には、ジャムカの代わりにセングムが入っており、本節の語り手がジャムカと関わりがあることがここからもうかがわれるのである。

⑩ 巻4 §142 *bidan-u* 「我々の先遣隊は彼らに呼びかけ合って大声で話し晩になられて¹¹⁾」
(04:34:08)

考察：“我々の先遣隊”というこの表現は⑨と同じく、対ジャムカ戦争の文脈で登場する。⑨との違いは、ここでは⑨のように人名は出ていないことである。しかし、この場面は次のように展開していることに注意したい。

我々の先遣隊は彼らに呼びかけ合って大声で話し、晩になられて「あくる日、戦いあおう」と言って退いて、本隊に合して泊った。

この叙述からみると、語り手が前面に出る場合には、ジャムカ軍と戦っていないことが観察される。しかも、この理由を“晩になられて”というように、人間界の事情ではなく自然界の摂理に帰していることは興味深い。なぜなら、自然の摂理は語り手が敵と戦おうとしても不可抗力であることを示すからである。つまり、自然の摂理を持ち出すことによって、語り手は巧妙にジャムカに対する謀反を起こさずに済むようにしているのである。

2. 6. タイチウド族のカダアンに配慮する語り手

⑪ 巻4 §146 *bidan-u* 「彼女の夫を我々の兵士達がすでに殺していた」(04:46:09)

§146の概要：§144からの続きの場面なので§144から概要を示す。§144ではチンギスはタイチウド族のアウチ・バートル、ゴドン・オルチャンと戦い、§145でチンギスはこの戦闘で負傷してジェルメに救出される。本節の§146では対峙し合っていたタイチウド族の兵士たちが夜のうちに四散したこと、チンギスが離散する人々を取り戻しに行ったこと、このときタイチウド族のソルカン・シラ老人の娘カダアンと再会したこと、カダアンは夫をチンギス陣営の兵士たちが殺そうとしているのをチンギスに救助してもらおうとしたこと、しかしチンギスの救助は間に合わず夫は“我々の兵士達”に既に殺されていたこと、この出来事を契機にタイチウド陣営にいたソルカン・シラ父娘がチンギス陣営の傘下に

入ったという内容が叙述されている。

考察：⑪の部分を考察するために補足しておく、チンギスがかつてタイチウド族に捉えられたさいにソルカン・シラとカダアン父娘はチンギスを匿ってやったという過去がある（巻2 §82～§87）。⑪の叙述の仕方は、カダアンの夫を殺害したチンギス陣営の下手人の中に語り手が属していたことを示している。語り手がもともとタイチウド族に属していたという前述の仮説に従えば、タイチウド族の側からみれば、語り手はタイチウド族からチンギス陣営に鞍替えをした裏切り者ということになる。それゆえ、もしカダアンの夫を殺さなければ語り手が同じ運命にさらされていたと想像される。それゆえ、語り手の行動は正当防衛的な性質を含んでいるように思われる。興味深いのは、語り手がカダアンには同情的であつたらしいことである。このことは次のような展開から推測できる。

彼女の夫を、我々の兵士達がすでに殺していた。それらの人衆をもどらせて、チンギス・カハン、大軍はその幕営に泊った。カダアンを招いて来させ並び座らせた。

以上のように、カダアンはチンギスの側室になったことが暗示されている¹²⁾。

2. 7. タタル族に配慮する語り手

⑫ 巻5 §154 *bidan-u* 「砦を築いたタタル族に対して、我々の兵士達が何度も攻めることになり、非常に痛手を受けた。」(05:20:05)

§154の概要：前節に連続している箇所なので§153の概要も述べる。§153では、狗の年の秋、チンギスはタタル諸族とダラン・ネムルグスという地で合戦し、その際にチンギスは軍律を定め、それに違反したアルタン、クチャル、ダイダイを罰したという内容が叙述されている。続く§154では、チンギスが対タタル族戦において勝利した際に、タタル族の人々をどのように処するかの評議において、車のこしきと比べてその高さに達しない背丈のタタル族を処刑することをベルグテイがタタル族のイエケ・チェレンという人物に漏らしてしまったということが叙述された後、このベルグテイの漏らした情報によりタタル族が大いに抵抗をしたという内容が叙述されている。

考察：⑫はタタル族と戦うチンギス陣営に語り手がいたことを示している。とはいえ、問題の表現の箇所の叙述をよく見ると、チンギス陣営はタタル族に勝利したものの、この最後の抵抗において「非常に痛手を受けた」と叙述されていることが注意を引く。語り手は見かけ上、チンギス陣営にいるのでタタル族に勝たねばならないが、タタル族に痛手を受けることによって、タタルに部分的に負けようとするのである。つまり、この箇所はタタル族へ配慮した叙述となっているといえる。

⑬ 巻5 §154 *bidan-u* 「我々の兵士達を大いに消耗させた。」(05:21:01)

考察：この箇所は、⑫の箇所のすぐあとである。重要なので、次に⑫と⑬の部分そのまま引用しておこう。

砦を築いたタタル族に、⑫我々の兵士達が何度も攻めこむことになり、非常に痛手を受けた。砦を築いたタタル族を苦勞して降して全滅させ、車轄に比べて殺戮する時、タタル族が共に言い合うのに、「人ごとに、自分の袖に刀を忍ばせて、枕にとって死のう」と言い合って、また非常に痛手を受けた。これ

ほどにタタル族を車轄に比べて殺戮し終えて、そこでチンギス・カハンが命ずるのには、「我々が自分の一族をもって大談合をし終え合ったことをベルグテイが告げたゆえに、⑬我々の兵士達を大いに消耗させた（下線筆者）。

ここでもチンギス陣営は全体としてタタル族に勝利したが、「我々の兵士達」という語り手が属している人々は敗北している。⑫の解釈と同様、ここにも語り手のタタル族寄りのスタンスをうかがうことができる。

⑭ 卷5 § 155 *bidan-u* 「我々の兵士達が遭遇した」(05 : 23 : 07)

§ 155 の概要：§ 154 に続く部分であり、すでに § 154 は考察したので、ここでは § 155 の内容だけを述べる。タタル族からチンギス陣営に投降してきたイエケ・チェレンの娘イエスゲンをチンギスがめとった後、イエスゲン妃は自分よりも姉イエスイのほうが美しいので姉を娶るようにチンギスに進言する。その言葉によりチンギスがイエスイを捜索させる。その捜索のなかで、夫と共に森に入って暮らしていたイエスイを“我々の兵士達”が遭遇してイエスイを連れてきたこと、チンギスは最終的にイエスイだけでなくイエスゲンも妃にしたという内容が叙述されている。

考察：この場面だけから見ると、語り手はタタル族寄りの立場に立っていることが見受けられる。秘史の「作者」がタタル族に好意的であることはすでに本誌第6号において考察していたことであるが、ここでは「語り手」にもそれが見受けられることは、「作者」と「語り手」との関係を考えるうえで大きな意味をもつ。とくに、この⑭の「我々の兵士達が遭遇した」というすぐ後の文に「彼女の夫は逃げ去った」とあることは重要であるように思われる。なぜなら、この⑭を含む § 155 のすぐ次の § 156 において、イエスイのこの夫はチンギスによって殺されているからである。つまり、チンギスがイエスイの夫の死に積極的に関わっているのであって、語り手はこのイエスイの夫の死に関しては何ら関係していないことが観察されるからである。ここにも、語り手のタタル寄りの立場をうかがうことができる。

2. 8. ナイマン族に配慮する語り手

⑮ 卷5 § 158 *bidan-u* 「我々の偵察隊に追いたてられ、山を登って逃げることになり、自分の腹帯を切られて、そこで捉えられた」(05 : 28 : 06)

§ 158 の概要：§ 158 では、ケレイト族の王罕と共にチンギスがナイマン族のグチュグト氏のブイルグ・カン（人名）に出陣したことが叙述されている。彼らがウルグ岳のソゴク川にいるナイマン族のところにとると、ブイルグ・カンは対峙しかねてアルタイ山地を超えて移動したとある。その後の戦況についての叙述は考察部分と関わるので、以下、節の最後まで引用しておく。

ソゴク川からブイルグ・カンを追って、アルタイ山を超えさせて、クム・シングルのウルグ川を下って追撃していく時、イエデイ・トゥブルクという名をもつ彼の頭目は偵察隊として行動し、⑮我々の偵察隊に追いたてられ、山に登って逃げることになり、自分の腹帯を切られて、そこで捉えられた。ウルグ川を下り追撃して、キジル・バシ湖で追いつき、ブイルグ・カンをそこで誅滅した。

考察：この戦いにおいては、ブイルグ・カンは形勢不利であったと描写されており、アルタイ山を超えようとしているところを、語り手の属している“我々の偵察隊”に追い込まれて捉えられ、最終的に殺されたと読める。しかし、文法的に言えば、“我々の偵察隊”に追い込

まれ、捉えられたのはブイルク・カンその人ではなく、偵察隊にいたイェデイ・トゥブルクという人物であったとも読める。引用文における“我々の偵察隊”は主語の位置にあるわけではなく、「追いたてられ」とあるので、まるでこの文章の主語は一見ブイルク・カンかその兵士達のように読める。しかし“ブイルク・カンをそこで誅滅した”とあるから、主語はチンギス側でなければおかしい。“ブイルク・カンをそこで誅滅した”という文の直後の § 159 の冒頭の文章には“そこからチンギス・カハンと王罕が帰り来る時に”とあるので、主語はチンギス側である可能性が高い。ここから少なくともいえることは、ブイルク・カンを誅したのが偵察隊であるのかないのかは不明瞭としか言いようがないということである。

こうした不明瞭さは語り手がナイマン族の立場に立っていることからくるように思われる。この可能性はこの場面だけでは判断できないが、すぐ直後の節 § 159 と § 160 における内容を考察すれば理解できるものとなる。§ 159 では、王罕は次の日にナイマン族のコグセウ・サブラグという勇者と対戦することになっている前夜になぜか自分の陣営に火を焚かせてカラ・セウル川を遡って移動する。着目すべきことは、この内容が述べられる § 159 の直後の § 160 においてジャムカが前触れなく登場し、ジャムカが王罕と一緒に行動している描写が出現することである。その際にジャムカは王罕に、チンギスはナイマン族と通じている、と讒言する。

この流れをみれば、ケレイト族の王罕はジャムカに会うためにチンギス陣営を秘かに離れたかのように見える。王罕はジャムカの讒言を聞いた後にチンギス陣営を離脱したと明示されているので、ジャムカに会った最初の時点ではチンギス陣営を一時的に離れたに過ぎないと読める。しかし、チンギス陣営を離脱したにも関わらず、王罕軍はナイマン族のコグセウ・サブラグに攻められ、この戦闘で王罕はナイマン族に息子のセングムの妻子や財産を奪われる。王罕はチンギスを裏切ったにも関わらず、息子の家族の救助をチンギスに求める。チンギスは王罕にセングムの妻子と財産を取り戻してやる。

以上のように、ジャムカは王罕にチンギスについての讒言をして裏切っているのだが、結果的には、王罕はチンギスに借りを作ることになったわけであるから、ジャムカの真意は不明であるものの、ジャムカの讒言はチンギスに最終的には有利に働いたことになる。むしろ、明示的には別に読める。ジャムカの讒言の直後に、ウブチグタイ・グリーン・バートルという人物がジャムカに「へつらいて、どうしてあのように忠実な自分の兄弟を讒し中傷して言うのか」という発話があるからである。しかし、よく見ると、ジャムカの言葉は“私のテムジン盟友は”と切り出す次のようなものになっていることに注意したい。

「私のテムジン盟友は、以前より、ナイマン族に使者を出していた。今（も）来なかった。カンよ、カンよ、私は常在の雲雀です。私の盟友は飛びゆく雲雀です。ナイマン族に行ってしまうのだ。降ることになり残った。」と言った。

この発言はジャムカの讒言と従来解釈されてきたが、そのように解釈するなら、「今（も）来なかった」という発言は意味不明なものになっていると言わなければならない。なぜなら、この発言から、ケレイト族の王罕がチンギスを裏切ったのではなく、逆にチンギスが王罕を裏切ったとも読めるからである。この部分は考察が別個必要と思われるが、この問題を据え置くとしても、ジャムカの発言が“私のテムジン盟友は”という表現で始まっており、ジャムカの

スタンスはチンギス側に立ったものと読めることは否めない。

これを検討するためには、秘史においては全く記されていないが、そもそも誰が王罕とジャムカとの間の連絡役であったのかという問題を考察する必要があるように思われる。この人物はやはりこの⑮の“我々の偵察隊”に示されている語り手と関係しているように思われる。なぜなら、物語の流れを順にたどると、“我々の偵察隊”という表現が見えるのが § 158、王罕がチンギス陣営から一時的に離脱したとする内容が § 159、ジャムカの讒言によって王罕がそのままチンギス陣営を離脱するのが § 160、チンギスが王罕の裏切りに気付くのが § 161、そして同 § 161 においてチンギスは最終的にサアリ草原に下営したと叙述されているからである。

サアリ草原は、④で論じたように、サアリ草原は語り手がジャムカ陣営からチンギス陣営に投降したあとに拠点としていた場所と考えられる一むろんもともとこの場所を拠点としていた可能性もある一。 § 161 における「サアリ草原に下営した」という表現は § 158 から § 161 で叙述されている内容に関わっていたことを暗示している。つまり、語り手はチンギス陣営と共に行動していた、あるいは行動したかのように叙述しているのである。別の言い方をすると、語り手が関わっている表現の間に事件が差し挟まれていることから、語り手は事件にも関わっている可能性が高いと思われる。

重要なのでさらに考察を加えると、ここで議論しているジャムカの「讒言」は、最終的にナイマン族を殲滅する巻 7 § 195 と関連しているように思われることである。 § 195 においては、ジャムカはナイマン族のタヤン・カンと行動を共にしてチンギス陣営に敵対しているにも関わらず、ジャムカはタヤン・カンにチンギス陣営の恐ろしさを伝えており、タヤン・カンを心理的に退却に追い込んでいる。このように、なぜかジャムカはチンギスに敵対しながらも味方しているような矛盾した行動を取っているのである。

ジャムカがいつナイマン族陣営に移ったのか不明だが、ジャムカはそのずっと手前の巻 6 § 170 という箇所においても、ナイマン族の陣営にいて王罕についての情報をチンギスに横流しして王罕を裏切っており、チンギスに利する動きをしていることが観察される。それゆえ、ジャムカの行動を一貫したものとみなす場合、ジャムカの § 160 の発話を明示的な「讒言」としての意味に解することはできない。 § 170 は、後続の箇所を検討する⑯や⑰を含む § 171 にも関連する節であることにも注意する必要がある。

巻 5 § 160 を巻 6 の § 170 や巻 7 の § 195 と関連づけて解釈するならば、ジャムカはこの⑮の 2 節後の巻 5 § 160 においてすでにナイマン側にいた可能性がある。つまり、ジャムカはナイマン族陣営にいたと同時に、王罕のケレイト族陣営にも属していた、という可能性がある。ただし、ジャムカ個人は別として、ケレイト族陣営本体はナイマン族陣営と、この時点では対立していたらしい。なぜなら、ナイマン族陣営はケレイト陣営を攻めて、前述のように、王罕の息子セングムの妻子を奪っているからである。

不思議なのは、王罕がジャムカの「讒言」を信じて、チンギス陣営から離れて、チンギスの対ナイマン戦から離脱するにも関わらず、王罕のほうにむしろナイマン族から攻撃を受けたという明示の流れである。たしかに、ナイマン族の攻撃は直接王罕に対するものではなく王罕の息子セングムに対するものであるが、後続の部分で王罕はセングムを救助するようにチンギスに頼んでいるのであるから、ナイマン族によるセングム攻撃は間接的に王罕への攻撃と解せる。

ナイマン族はなぜチンギス陣営ではなく、王罕陣営を攻撃したのであろうか。むろん、明示的にはチンギス陣営と王罕陣営は最初は味方同士であったのだから、ナイマン族は両陣営を区別することができなかつたのかもしれない。しかし、ここでもし、ジャムカが王罕のケレイト族陣営にもいて、また同時にナイマン族陣営にもいたとすると、ジャムカが間諜としてナイマン族に情報を流した可能性が浮上してくる。その場合、王罕側において、しかもナイマン族に通じているジャムカが、チンギス陣営の情報をどのように入手したのかという疑問もまた起こる。

こうした疑問を解決する解釈として可能性を指摘したいのが、ジャムカ自身が出している“私のテムジン盟友は、以前より、ナイマン族に使者を出していた”というナイマン族への使者者というのは、実は語り手のことを指しているのではないかということである。ジャムカの行動がチンギス陣営にいる語り手に筒抜け状態であるという事実は、この傍証ともなるのではなからうか。しかもこの場合、語り手とジャムカは二重写しとなっている点も注目し値する。なぜなら、§ 159でジャムカがナイマン族の陣営でもあり王罕陣営でもある陣営にいながらチンギスに最終的に利する発言をしていることを重視すれば、ジャムカもまた密かにチンギス陣営において、〈チンギス側が送ったナイマン族側にいる使者〉と言えなくもないからである。

以上のように、語り手がチンギス陣営にいるにも関わらず、ナイマン族陣営に敵対する態度が明瞭に見られない背景には、ナイマン族陣営にいるジャムカへの配慮が働いたことが推測される。語り手のジャムカに対する忠誠が、このような非常に錯綜した叙述を生み出したということである。

2. 9. ケレイト族或いはケレイト族の領袖である王罕に配慮する語り手

⑩ 第5巻 § 165 *bidan-i* 「己を尊大に考えて、我々を見下して話し、チャウル・ベキを与えず、喜ばなかつた」(05 : 39 : 05)

§ 165の概要：本節においては、チンギスがケレイト族の王罕とより深い関係を結ぼうとして、長子ジョチに王罕の息子セングムの妹チャウル・ベキとの縁組を、逆にセングムの子サカに自分たちのゴジン・ベキ(人名)を与えようという縁組を提案するが、王罕の息子であるセングムはチンギスの使者として遣わされた“我々”を見下すという内容が叙述されている。

考察：§ 165の文脈をみると、語り手はチンギスの使者の一員であることが明示的に示されている。このことは⑩の考察とも通じるが、興味深いのは、この§ 165のすぐ直後の§ 166が“そのようにやる気が後退したのをジャムカが覚って”という文で始まることである。語り手が登場するすぐ直後にジャムカが登場するので、語り手はチンギス陣営の情報をジャムカに秘かに伝達していたのではないかと推測される。この推測は⑩の分析とも符合している。

セングムはこの対応以降に“赤子セングム”と叙述されていることから、「作者」—ここでは“我々”表現と関連していないので語り手とは書かないことにする—が王罕の息子セングムへの軽蔑があることは明らかである。これに対して、ジャムカがどのような行動を取ったかという、ジャムカはセングムをチンギスに敵対させる讒言を言うことで、セングムをチンギスに敵対させる行動を取っている。このセングムに最終的に引きずられて、セングムの父親である王罕はチンギスと戦わざるを得なくなる。この⑩の考察で重要なのは、次の2点である。1つには、語り手が〈チンギスの使者〉であることが明示的に示されていることであること、も

う1つには、語り手が密かにジャムカに通じている者であることがうかがわれることである。

⑰ 卷6 §171 *bidan-u'ai* 「彼等を制圧し、沈む太陽が丘の上にかかっている時、我々のところの者ももどって」(06:09:10)

§171の概要：この節は前節の§170に連続しているので§170の内容も示す。§170では、チンギスはケレイト族の王罕の急襲を逃れるが、このとき、ジャムカは王罕と共にいたと叙述されている。王罕はチンギス陣営の勇者たちの勇猛さをジャムカから聞き、自分の軍の指揮をジャムカに任せようとする。軍の指揮を任されたことによりジャムカは王罕に対する信頼を失い、王罕陣営の内情をチンギス陣営に知らせる。続くこの§171ではチンギスはこのジャムカの言葉を受ける。その後、チンギス軍はケレイト軍と戦争になるが、この戦争ではマンガト族のクイルダルが戦死したこと、ウルウド族のクイルダルが活躍して王罕の息子セングムを負傷させるに至ったという内容が叙述されている。この叙述の直後に⑱があるので、⑱も含めてこの箇所を節の最後まで引用しておく。

彼等を制圧して、沈む太陽が丘の上にかかっている時、⑰我々のところの者ももどって、クイルダルを、倒れ傷ついたのを連れて帰り、チンギス・カハンを⑱我々のところの者は王罕から、合戦した地から離れて、夕方うちに移動し離れて泊った。

考察：ここで興味深いのは、語り手はチンギス陣営にいてケレイト陣営と戦っているにも関わらず、この箇所の叙述をみると、⑩と同様に、自然の摂理で日が暮れて、陣営にもどってきたことに言及されており、語り手が対ケレイト戦に消極的である姿勢がうかがわれる。

⑱ 卷6 §171 *bidan-u'ai* 「チンギス・カハんと我々のところの者は、王罕から、合戦した地から離れて、夕方うちに移動し離れて宿った」(06:10:01)

考察：前述のように、この部分は⑰のすぐ後続する部分である。⑱を読むと、語り手の属する軍勢とチンギスの軍勢とは離れて宿ったというから、この営地の配置は戦術のひとつだったといえるかもしれない。とはいえ、“王罕から、合戦した地から離れて”という行動を取っていることをみると、すぐ手前の⑰の事例と同様に、王罕に対して語り手は対決姿勢をもっていないことを示しているように思われる。⑰にも当てはまるが、これはおそらくは先のナイマン族の場合と同様に、チンギスと王罕の戦いが始まる巻6 §170において叙述されているように、ジャムカが王罕の陣営にいることと関係があると考えると理解できるものとなる。

⑲ 卷6 §172 *bidan-u'ai* 「我々のところの者は夜のうちに自分の去勢馬をつかまえて泊り」(06:11:06)

§172の概要：前述の§171の続きで、この節では、§171の事件の翌日にチンギス陣営でオゴタイ、ボロクル、ボールチの3人の姿が見えないのをチンギスが心配する。その直後にこの箇所を含む次のような文が叙述されている。

⑲我々のところの者は夜のうちに自分の去勢馬をつかまえて泊り、チンギス・カハンが言うのに、「我々の後から追って来れば応戦しよう」と言って（軍を）整え陣立てした。

上記の叙述のあと、この節ではボールチが命からがらチンギス陣営に再合流したと叙述されている。

考察：引用箇所を見ると、やや離れたところに宿営したチンギスが語り手のいる軍に指令を送ったかのように読める。しかし、この部分は、語り手がジャムカの立場にいるとすると、逆の読みが可能となる。つまり、「我々のところの者」こそチンギス軍と戦わんとしているかのようにも読めるのである。ところで、ここでチンギスの息子でチンギスの後継者となったオゴタイ、拾い子の1人ボロクル、チンギスの親友ポールチがチンギス陣営から外されていることが観察される。この意味についてはさらに考察の必要があるように思われる。

2. 10. ナイマン族の斥候と同じスタンスとなっている語り手

㉔ 卷7 § 193 *bidan-u* 「我々の斥候と追いつ追われつ」(07:22:09)

§ 193 の概要：この節ではチンギス陣営とナイマン族陣営との戦いが叙述されている。この㉔を含む § 193 には“我等の斥候”という表現が3度出現し、この㉔は最初のものである。考察で必要となるので、これら3度出現する箇所を引用しておきたい。また、考察の中で必要となる“ナイマン族の斥候”という表現にも番号(i)～(iv)をふっておく(ただし(iv)は次の引用文の中にある)。

ケルレン河を遡ってジェベ、フビライ二人を先鋒隊として進みサアリ草原に到ると、ハンガイ山の頂に (i) ナイマン族の斥候がそこにいた。㉔我々の斥候に追いつ追われつ、㉕我々の斥候は一頭のシンクラ馬がよくない鞍のつけているのを (ii) ナイマン族の斥候にとられた。(iii) ナイマン族の斥候はその馬をとって話合うのに、「モンゴル族の去勢どもはやせ細っている」と言い合った。㉖我々のところの者はサアリ草原に到ってそこにとどまって「どうするべきか」と言い合えば…

この後、ドダイ侍従が味方の数が少ないのでサアリ草原で馬を肥やし、その間に敵を欺くために火を人

1人につき5ヶ所ずつ焚くことをチンギスに進言する。この進言をチンギスが承諾して実行させると、ナイマン族の斥候がタヤン・カンに粗末な馬を与え、そのあとで追い打ちをかけるように、モンゴル族の兵士の数が星の数よりも多いことを伝えたという内容が叙述されている。

考察：この節で注意を引くのはやはり、出来事の舞台がサアリ草原とされていることである。前述の㉔でも考察したが、“我々の”という語り手を示す表現とサアリ草原が同時に出現しており、サアリ草原という地名は語り手を想起させる地名となっている。いずれにせよ、ナイマン族の斥候がいたところを“我々の斥候”が追いつ追われつしているのも、珍しく語り手はチンギス陣営側に立っているということになる。しかし、これは㉔の考察で覆される解釈となる。まずは次の事例を検討しよう。

㉕ 卷7 § 193 *bidan-u* 「我々の斥候は一頭のシンクラ馬がよくない鞍のつけているのをナイマン族の斥候にとられた。」(07:22:10)

考察：ここでは、“我々の斥候”という語り手を含む人々がナイマン族というチンギス陣営にとって敵である人々に馬を奪われた失態が描かれている。これは、ナイマン族にとって有利なことであるので、この叙述は語り手がナイマン族側にあることをうかがわせている。これは前述の㉔の解釈と矛盾している。この矛盾はやはり、次の㉖の考察で解決されるように思われる。

㉔ 卷 7 § 193 *bidan-u'ai* 「我々のところの者はサアリ草原に到ってそこにとどまって」(07 : 23 : 03)

考察： § 193 で 3 度登場する“我々”表現の最後の事例である。この場面でも、語り手とサアリ草原との関係の深さが示されている。とくに、この § 193 では、サアリ草原という地名が 5 度も言及されていることは興味を引く。前述のように、ナイマン族に馬を奪われ、その馬が痩せているという状態を知られてしまったチンギス陣営は、人ごとに火を 5ヶ所焚くことによって兵力の多さをカムフラージュするという演劇的戦法に出る。興味深いのはこうした対応をした後、次のように叙述される点である。

夜、(iv) ナイマン族の斥候がカンカル山の頂から、夜、多くの火を見て「モンゴル族を『少ない』と書いていなかったか。星より多い火をもっている。」と(言つて)タヤン・カンによくない鞍のついた白っぽい馬を与え遣つて、「モンゴル族の兵士達はサアリ草原にみちるまで下営しました。日ごとに湧き出るように増えているのでしょうか。星より多き火をもっている。」と書いて遣つた。

この (iv) の“ナイマン族の斥候”であるが、㉑で考察したように、ナイマン族に馬を奪われるという失態を犯した斥候の中には語り手が含まれていたと考えられること、そしてこの失態がナイマン族に利することを考えると、語り手は“ナイマン族の斥候”と同じスタンスに立っているといえる。とすると、前述の § 193 の 1 度目㉑の“我々の斥候”は、実は“ナイマン族の斥候”と敵対しているように見せかけて、実は敵対していなかったということになる。それどころか、両者は同一人物であったというような下記の解釈もできる。

つまり前記の (i) ~ (iii) で言及される“ナイマン族の斥候”に馬を奪われた“我等の斥候”は、タヤン・カンにモンゴル族の情勢を伝え、その後に粗末な鞍のついた淡黄色の馬を与えたと叙述されている (iv) の“ナイマン族の斥候”と同一人物である可能性がある。このように考えると、語り手がチンギス陣営に立っている㉑とそうでない㉒との矛盾が解消されることになる。つまり、ここは一種の言語トリックになっていて、一見すると語り手の属する“我等の斥候”とナイマン族の斥候が戦っているように見えるが、実際には両者は同一人物で何も事件は起こっていないということになる。

㉕ 卷 7 § 195 *bidan-u* 「ナイマン族の斥候を我々の斥候が追いたてて」(07 : 32 : 08)

§ 195 の概要： この部分の内容は § 193 からの流れの中に置かれているので § 194 の内容も述べる。§ 194 では、ナイマン族の領袖タヤン・カンは息子と兵を統べる大長官コリ・スベチにその臆病さを非難される。㉕を含む § 195 では、こうした非難に対して怒ったタヤン・カンがチンギス陣営との対決を決意したこと、チンギスが自ら先鋒軍を率いカサルに本隊を統べしめオドチギンに従馬を任せたこと、ナク懸崖の南面の麓に沿って布陣していたナイマン族の斥候を我々の斥候が追撃してナク懸崖のナイマン族の本営まで追い込んだこと、こうした戦況を見てタヤン・カンがジャムカにチンギス陣営の“四頭の狗”と呼ばれる 4 人の勇者をはじめとする勇者について尋ねたこと、そしてジャムカが勇者たちの武勇を伝えるたびにタヤン・カンが退却しようとして発した言葉の数々が叙述されている。

考察： 卷 7 § 193 で登場する㉑・㉒・㉓で考察したことを踏襲するなら、この㉕の“我々の斥候”も“ナイマン族の斥候”と等しいということになる。とすると、ここで“ナイマン族の斥候”を“我々の斥候”が追いたてる、ということは前述と同じ類の言語トリックとみなせ

る。すなわち、語り手を指示している“我々の斥候”が対ナイマン戦において意味ある行動をしているように読めるが、実際には何らの行動も取っていないのである。

§ 193 の 3 事例における考察をこの § 195 でも敷衍することは妥当であると考えられる。なぜならば、この“ナイマン族の斥候を我々の斥候が追いたてて”という箇所直後に、概要でも記したように、ナイマン族の領袖であるタヤン・カンがジャムカにチンギス陣営の勇者たちがどういう人物たちかを尋ね、ジャムカの説明によりタヤン・カンが恐怖を覚え退却していくという展開となっているからである。ここで重要なのは次の 3 点である。

(1) 語り手は明示的にはチンギス陣営の立場に立たなくては行けないのでナイマン族と戦っていること。

(2) 非明示的に“語り手はジャムカに忠実であろうとしてジャムカの身を寄せるナイマン族陣営への配慮がある。それゆえナイマン族の斥候”イコール“我等の斥候”の語り操作がなされていること。

(3) は、(1) と (2) の矛盾を解決するために、語り手はあたかもジャムカと一緒にナイマン族を追い込んでいるように描くというように処理したこと（むしろ非明示的に）。

(3) は特に重要である。なぜなら、ここには語り手の欲望が表出されているように思われるからである。つまり、§ 193 と § 195 の叙述において、語り手はたしかにチンギス陣営とナイマン族陣営にそれぞれ配慮しているのであるが、ナイマン族陣営にいるジャムカと共に、語り手がナイマン討伐に活躍するという趣向は、チンギスのために武功を立てるという大義名分を担保しつつも、チンギスをナイマン征伐の立役者とはさせない巧妙なやり方だと思われるからである。

2. 1 1. メルキト族に配慮する語り手

④ 卷 8 § 198 「我々の家人達^{ユトブツ}が彼等を制圧した」(08 : 04 : 09)

§ 198 の概要：当該節では、メルキトの領袖トクトア・ベキの長子クドゥの妃のひとりであるドレゲネをオゴタイに与えたこと、チンギス陣営がタイカル砦に立てこもって抵抗を続けたメルキト族をチンバイに攻撃させたこと、トクトア・ベキがナイマン族のタヤン・カンの息子クチュルク・ハンと合流して軍勢を立て直そうとしたこと、にも関わらずトクトア・ベキが戦死したこと、ナイマン族のクチュルグ・カンがサルタウル族の西遼のグル・カンのもとに赴いたこと、その後チンギスが帰途についたあと、チンギス陣営に降っていたメルキト族が本陣から蜂起したこと、そしてこれらをチンギス陣営が降したこと、その際にひとまとまりに投降させるのではなく分属離散させた出来事等々が叙述されている。

考察：“我々の”という表現は、すでに投降していた本陣にいたメルキト族が叛いたさいの対応として、“我々の家人達が彼等を制圧した”という叙述の中で現れる。ここで指摘しておくべきことと思われるのは、メルキト族に対して語り手のスタンスが曖昧だと思われることである。なぜなら、ここで彼等を制圧した主語は“我々”ではなく、“我々の家人達”だからである。語り手の立場はチンギス陣営にありながらも、実際にメルキト族に対して手を下していると表現されているのは、語り手自身の“家人達”なのである。つまり、語り手はメルキト陣営への攻撃に消極的な様子がうかがえる。この理由を考える場合、ジャムカが身を寄せていた

ナイマン族がメルキト族と連合してチンギス陣営と戦っていたことと関係していると考えられると理解できるものとなる。つまり、この箇所は、語り手のジャムカに対する配慮という性格を隠された背景としてもっているということになる。

2. 12. 金国の中都経営に関心を寄せる語り手

㉕ 卷 11 (続集巻 1) § 248 *bidan-u* 「我々の兵士達は絹布類、財物を耐えられるほど積んで、熟絹で自分たちの荷物を縛って行った。」(11 : 07 : 02)

§ 248 の概要 : 前節 § 247 からの流れにある節であるので、§ 247 の概要も述べる。§ 247 では、チンギスが未の年に金国に出征したこと、ジェベが居庸関で才知を働かせて敵軍を制圧したこと、チンギスが金国の首都である中都を包囲したこと、再びジェベが才知をもって金国軍を油断させて東昌城塞を奪取したことが叙述されている。続く本節 § 248 では、ジェベが東昌城塞を占領して帰還した後チンギスと合流して金国の中都を攻めたこと、金の皇帝の長官である王京丞相オンギン・チンギンが皇帝にモンゴル族と一旦和議することを勧めたこと、金皇帝がこれを了承しチンギスに公主を差し出し¹³⁾、財物を与えたこと、これに対してチンギスもこの和議に応じ城を包囲していた軍兵を引いたこと、そして「我々の兵士達は絹布類、財物を耐えられるほど積んで、熟絹で自分たちの荷物を縛って行った」こと、すなわちラクダに戦利品を積んで帰還したことが叙述されている。

考察 : この㉕は前出の㉔からかなり隔たった箇所に久々には現れている箇所である。“我々の兵士達”という表現は当該節の末尾に現れている。語り手の位置或いはスタンスの観点からみると、語り手は、金国の中都攻略に参加していたということで、軍功をチンギスと共有しているということが観察される。これまでの考察では、語り手はチンギス陣営に属しながらチンギスに敵対するジャムカに忠誠を尽くしていたことを述べてきた。しかし、ジャムカは巻 8 § 201 においてチンギスによって殺害されているので、この箇所における非明示的意図をさぐるさいに、これまでの前提は使えないことになる。この箇所は次の㉖と連動していると考えられるので、最後の“我々”表現の事例でもある㉖と一緒に考察することにしたい。

㉖ 卷 11 (続集巻 1) § 263 *bidan-u* 「彼の子マスグド・クムシを我々の首長達ウルンゲチと共にブカル、セミスゲン、…の城々を統べさすべく任せ」(11 : 50 : 08)

§ 263 の概要 : 当該節では、サルタウル人衆を降したあとの統治について、ウルンゲチ城塞から来たサルタウル人のヤラワチ、マスグドという父子 2 人が城塞の制度や規律をチンギスに説明したこと、チンギスがこれを受け入れ、ヤラワチの息子マスグドを、“我々の首長達”と共にブカル、セミスゲン、ウルンゲチ、ウダン、キスガル、ウリヤン、クセン・ダイル等の城々を統治させるべく任命したこと、そしてその父のヤラワチを金国の大都の城塞を統治させたことが叙述されている。

考察 : この内容を見ると、先の㉕の事例と連続性があることが判明する。ここでは、金国を降した後の統治についての問題が叙述の焦点になっていることが理解される。当該節の末尾も次のように締めくくられている。

サルタウル人からヤラワチ、マスグド二人の「城塞の制度、規律をよくする」の故に、金国人衆を統べさすべく首長達と共に任せた。

語り手の意図したことを考えてみると、この時点で語り手が常に忠義を果たしてきたジャムカが既に死去していることは大きな意味をもつ。なぜなら、叙述の非明示的な動機となってきたと考えられる原理がないことで、別の原理を考える必要性が出てくるように思われるからである。その場合、ここで新しく言及されているサルタウル人のヤラワチやマスグドといった人々は注意を引く。なぜなら、彼らの生き方は語り手のそれとは異なるからである。サルタウル族のヤラワチやマスグドといった人々は彼ら自身の能力によって、金国の首都であった中都に、そしてその後にモンゴルの地となった大都に仕えるべく送り出されたのである。彼らが選ばれたのは“城塞の制度、規律をよくする”からであって、どのような主人に仕えていたかということは重要ではなかった。

これまでの叙述では、どのような人物に仕えるかということが語り手の叙述を左右してきた。すなわち、明示的には示されなくとも、非明示的には語り手はジャムカに忠実であることに注意を払ってきたといえる。ところが、どうであろう。ヤラワチやマスグドといった人々は、仕える主君が次々に変化しても、すなわちどのような政局の変化があろうとも、彼らの行政的手腕が高く評価されたので、彼らの地位は揺るがなかった。ヤラワチやマスグドといった人々のこのような生き方は、語り手のそれまでの生き方に終止符を打つほどの発想の転換を促したことは大いにあり得ることであろう。語り手は、ジャムカ亡き後、政治的激動期における生きる軸を、忠義を尽くすべき他者ではなく、己の能力に180度転換したということが想像されるのである。

これまで考察してきたように、もともとタイチウド族陣営にいてジャムカに仕えていた語り手は、チンギス陣営にいながらどのようにジャムカへの忠義を全うするかということに拘泥してきたといえる。しかし、サルタウル族のヤラワチ、マスグドをみて、こうした煩悶から抜け出すひとつの解決策が、高度な専門知識をもつ職掌 *technocrat*”として生きる道であったといえよう¹⁴⁾。このように考えると、㉔を最後の事例として、語り手が秘史に現れないことは不思議なことではない。

3. まとめ

以上の考察を整理しよう。本論の考察の肝要な第一歩は、秘史の語り手がもともとはチンギスの同族集団であるが敵対しているタイチウド集団にいて、ジャムカもともとはチンギスの同盟者であるが後に対立していく人物である—に忠誠を尽くしていたものの、途中でチンギス陣営に降った形跡を捉えたことであつたといえる。とくに、この仮説をもって、語り手の意図が一貫していることを観察することができたことは重要なことである。このことは、地の文における“我々”表現が決して偶然に出現していないことを示しているからである。

考察を整理すると、本論の26の事例は次のように大きく3つの段階に区切ることができるように思われる。1つめの区切りは、語り手がジャムカに従うタイチウド族の陣営からチンギス陣営に移行したということが示されるまでの①～③の箇所、第2の区切りは、チンギス陣営のなかで語り手がタタル族、タイチウド族、ナイマン族、ケレイト族、メルキト族に対する戦争でチンギス陣営にいながらジャムカに忠実にふるまっている④～㉔の箇所、最後の区切りは、ジャムカの死後、語り手がジャムカという特定の個人への忠義ではなく、忠義の対象に関わり

のない technocrat としてのアイデンティティを確立しようとした形跡のある⑳～㉔の箇所である。

ただし、本論では、第1段階の仮説を第2、第3段階に応用したことになるが、ジャムカへの忠義という理由でのみ、こうした叙述が形成されたかどうかは再度検討の余地があるかと思われる。なぜなら、語り手は巻1、巻2、巻8～巻10、巻12という秘史の半分の巻にしか登場しないからである。こうした問題を考慮に入れると、“我々”表現の考察は、厳密に言えば巻3§110～巻11§263における秘史の叙述と関係することになる。

興味深いのは、この範囲の考察において、この範囲の叙述がなされた理由を推測できることである。すなわち、語り手は、チンギスの歴史を語るという体裁をとりながら、語り手の存在意義を模索する作業をしていたということである。むろん言うまでもなく、本論との関連だけで述べても、チンギスの歴史は体裁以上の重要な意味をもっている。なぜなら、チンギスの軍事行動をとおしてしか、語り手はこうしたサルタウルの人々には出会うことはなかったからである。ただし、これまでの考察における語り手の存在が示される行動と同じく、語り手が直接に関わった歴史的事実としてサルタウルに遠征したかどうかはわからない。重要なのは、語り手がこうした西域の technocrat たちと人生観を大きく変える出会いをしていたということが推測されることである。

以上、本論では、秘史の地の文における“我々”表現に着目することにより、秘史の叙述が語り手の政治的スタンスと密接に絡み合いながら巧みに構成されているさまを見届けたことになる。

引用

- 1) ただし、Igor de Rachewiltz は *The Secret History of the Mongols-A Mongolian Epic Chronicle of the Thirteenth Century, Volume One*, Brill Reiden・Boston, 2004, x x x viii-x x x ix における Rachewiltz のコメントによるとモンゴル国の Š.Čoïmaa は 1994 年の論文で一人称複数形に着目して、秘史の著者をチンギスの義父であるモンリク・エチゲとみなしているらしいが、筆者はこの論文を見ない。Š.Čoïmaa の見解については当該論文を入手した後に議論したい。
- 2) 前掲書 Igor de Rachewiltz, p.443 の § 119 のコメントリーにおいて Rachewiltz は *bidanu'ai* を “ours”, “our people” と訳し、これを “Temjin’s people, the Mongqol tribe” と等しいものと解釈している。また、これは語り手が出来事の実際の日撃者であったか或いは参加者であったことを示すのではないかという Gumilev の 1974 年の論文を挙げている。筆者は Gumilev 論文を現在のところ見ないが、コメントリーから推察するところ、Gumilev 論文は本論のようなテキスト主義をとっていない。なお小沢重男『元朝秘史全釈（中）』風間書房 1985 年 337-338 頁では議論に *bidan-u'ai* は取り上げられていない。
- 3) 会話文と地の文を無視すれば「我々の」を意味する“必答一訥 (*bidan-u*)”は計 67 回現れる。同様に、“必答訥埃 (*bidan-u'ai*)”は計 6 回、“必答納察 (*bidan-ača*)”は計 8 回、“必答泥 (*bidan-i*)”は計 14 回となる。なお、主格形の“我々 (*bida*)”は会話文で計 86 回現れるが、地の文では一度も現れない。これらの回数は、栗林均編、2009 年、67-70 頁に拠るが、この文献においては当然ながら会話文に現れるものと地の文に現れるものとが区別されていない。それゆえ、この区別をした上で示したのが、本論で対象とする 26 事例だということになる。
- 4) この考え方は拙著藤井麻湖『伝承の喪失と構造分析の行方—モンゴル英雄叙事詩の隠された主人公』日本エディタースクール出版部 2001 年 2-4 頁のテキスト研究とパフォーマンス研究の考え方について述べた部分が参考になるが、これについてはまた別に稿を改めて論じたい。
- 5) 原典は Roland Barthes, *Introduction a L'Analyse Structurale des Recits, Selection 1*, Editions Seuil, Paris, 1961-71. 邦訳は「物語の構造分析序説」『物語の構造分析』みすず書房, 1979 年, pp.1-54 を参照。
- 6) 前掲書の藤井麻湖 (2001 年) の第 I 部第 3 章の理論編 81-105 頁、特に 89 頁以降を参照されたい。
- 7) abduction はアメリカの論理学者チャールズ・パーズ (Charles Sanders Peirce, 1839-1914) が科学的

論理的思考の方法・様式として提唱した演繹、帰納とは異なるもう一つの推論法のことである。明記はしていないものの、本誌第6号の藤井真湖、『元朝秘史』におけるベクテル、ベルグテイ、“ベルグテイの母”の考察—“ベルグテイの母”の出身仮説をもとに—『現代社会研究科報告書』第6号、2011年、21-41頁でも用いている。

- 8) すなわち本論で使用した栗林均の著作で示された箇所が具体的に原典と対照されてローマ字転写されている栗林均・确精扎布編、『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引』、東北アジア研究センター叢書第4号、東北大学東北アジア研究センター、2001年を参照されたい。
- 9) この場合、語り手の裏切りの主人を“タイチウド族の領袖”と書いたが、もしかすると、それ以前の§72、§79、§81で登場するタイチウド族のタルクタイ・キリルトクと書くべきかもしれない。なぜなら、巻5 §149でタルクタイ・キリルトクはタイチウド族の領袖であると明示的に読めるからである。重要なのは、この人物がタイチウドの領袖であるかどうかは歴史的事実の問題ではなく、テキストの事実の問題として扱わねばならないということである。
- 10) この可能性は、たとえば、タタル族の問題を考慮すると、非常に興味深い。なぜなら、チンギスが義兄弟であるベクテルをカサルとともに殺害したことを激しく叱責するホエルンの発言は韻文で飾られており、「作者」のホエルンへの好意だったと理解されるからである。
- 11) 「晩になられて」というのは日本語でもモンゴル語でも奇妙な表現である。原文では受動態となっており、これは言語学的にも奇妙なものとなっている。
- 12) しかも、これが無理強いのことではなかったことは、この叙述の前にある次のような叙述から明らかである。若干長いですが、語り手のカダアンへの同情がよく表れていると思われる箇所なので引用しておこう。

峠の上で一人の赤い着物をきた女の人が「テムジンよ」と大声で泣き叫んでいるのをチンギス・カハンは自ら聞いて、「いかなる人の女がこのように泣き叫んでいるのか」と尋ねに人を遣った。その人が行って尋ねると、その女の人が言うのに、「私はソルカン・シラの娘です。カダアンという名です。私の夫をここに兵士達が捉えて殺そうとしている。私の夫を殺される時、テムジンに、「私の夫を救ってほしい」と私は呼び叫び泣いたのです。」と言った。その人が（戻って）来て、チンギス・カハンにこの言葉を言うと、チンギス・カハンはこの言葉を聞いて馬を駆って到って、チンギス・カハンはカダアンの処に下りて抱き合った。

この場面におけるカダアンの「救ってほしい」という発話には、カダアンのチンギスへの信頼がうかがわれる。カダアンにとって、チンギスは敵でもあるが味方でもある関係にあるのである。

- 13) 原文では「公主という名の乙女」とある。これはモンゴル英雄叙事詩でよくみられる表現形式である。
- 14) 今日の感覚からみて巨大行政組織におけるこうした technocrat の存在は自明のことであるが、チンギス時代の、少なくとも秘史の言語世界のなかでは決して自明ではなかったことに注意する必要がある。重要なので繰り返すが、本論の方法論においては、何事も歴史的事実を根拠にするのではなく、秘史の叙述のみを根拠にして結論しなければならない。そうしなければ、秘史の文学的研究の意味が失われてしまうことになるのである。